近代文学研究叢書

第七十三巻

昭和女子大学

近代文化研究所

近代文学研究叢書

第七十三巻

平成9年10月7日　初版印刷発行

著者　昭和女子大学近代文学研究室

発行者　高橋康也

印刷所　大文堂印刷株式会社

発行所　昭和女子大学近代文化研究所
東京都世田谷区太子堂一―七
電話03（三四一一）五一二九番
振替口座〇〇一四〇―三―一七〇八六七

ISBN 4-7862-0073-5　C3091
価格はケースに表示してあります

目次

口絵
『近代文学研究叢書』の成立……二
凡例……五
齋藤茂吉……七
三井甲之……三一九
堀辰雄……四五九
PROFILES……六八七
巻末付記……六九二
七十二巻年表補遺……六九四
索引……七〇六

『近代文学研究叢書』の成立

『近代文学研究叢書』は昭和三十一年一月、昭和女子大学光葉会からその第一巻が発行された。以来、明治期全十二冊、大正期全十三冊、昭和期が本巻を加えて四十八冊を刊行、続刊中である。

本叢書は、創立者人見圓吉（東明）が建学の精神に基づき優れた研究者の養成を目的とし、これによって文学日本の近代相がいささかでも究明出来ればという強い願望により創められたもので、本学学生による近世の国文学者、洋学者についての研究調査をまとめた『文学遺跡巡礼』（昭和十三年十月、第一輯発行）が母胎となっている。

昭和二十年、戦争も末期に近づいた四月の大空襲により、本学は校舎とともに蔵書と未発表原稿の一切を焼失した。青年時代、三木露風、野口雨情らとともに早稲田詩社をおこして活躍したかつての詩人東明は、この時から明治の詩書をはじめ近代文学関係の文学書の蒐集にとりかかり、現在の近代文庫の基礎が固められた。神田の古書展では「文学書の値をつり上げる」という評判が立つほどの蒐集ぶりで、こうして蒐められた典籍をもとに近代の文学者、思想家約八百名の伝記、業績に関する資料文献の尨大なカードの作成には日本文学科の学生が総動員され、『近代文学研究叢書』の基礎的資料の基盤が築かれたのである。なお、母胎となった『文学遺跡巡礼』はその名の示す通り、生涯と業績に加えて遺跡の実地踏査、遺族の訪問記を特色としたが、本叢

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

書はこの特色をそのまま踏襲している。すなわち、文学者の遺族を訪ね墓所や遺跡を踏査することによって、業績を含めたその全体像を闡明しようとするものである。また、著作と資料に関する年表調査も平行的になされ、網羅的な資料蒐集に意を注いでいる。業績については各専門分野における学界の権威に指導を仰ぎ、特に、発足当時の基礎固めには月曜会（学内における近代文学の研究）での研鑽が大きな支えとなった。

第一巻では明治三年二月歿のB・J・ベッテルハイム、八田知紀、S・R・ブラウン、J・R・ブラック、成島柳北、森有礼、新島襄、佐佐木弘綱、中村正直ら九名が収められ、以後歿年順に収録された文学者、思想家はこれまでに三百七十五名を数え、本巻を以て通巻七十三冊に及んでいる。その間、第六巻発刊の昭和三十三年に本叢書は菊池寛賞を受賞している。

なお、創刊当初から監修者として叢書の全般にわたりご指導、ご助言をいただいた方ですでに物故された諸先生を左に記して感謝の意を表したい。

秋庭　太郎（演劇学）　池田　亀鑑（国文学）　石田　吉貞（国文学）
石津　純道（国文学）　石森　延男（児童文学）　上井　磯吉（英文学）
上野　景福（英語学）　太田　三郎（比較文学）　荻原井泉水（俳文学）
片桐　顕智（和歌文学）　金子　健二（英文学）　金子　武雄（国文学）
河鰭　実英（歴史学）　木俣　修（和歌文学）　木村　毅（比較文学）

斎藤　一寛（仏文学）　佐伯　梅友（文法学）　坂本由五郎（英文学）
佐々木八郎（国文学）　笹沢　美明（独文学）　佐藤　幹二（国文学）
山宮　允（英文学）　島田　謹二（比較文学）　玉井　幸助（国文学）
辻村　鑑（英文学）　内藤　濯（仏文学）　中林　謙二（英文学）
成瀬　正勝（近代文学）　能勢　頼賢（国語学）　浜　徳太郎（美　学）
人見　圓吉（近代文学）　本間　久雄（近代文学）　宮内　秀雄（英語学）
矢野　峰人（英文学）　吉田　澄夫（国語学）

本巻には、医師・歌人齋藤茂吉（明治十五年五月十四日～昭和二十八年二月二十五日）、歌人・詩人・思想家三井甲之（明治十六年十月十六日～昭和二十八年四月三日）、小説家堀辰雄（明治三十七年十二月二十八日～昭和二十八年五月二十八日）の三名の研究調査を収めた。

凡例

一　著作年表は、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを収め、資料年表は、第三者の考説、評論、感想等の文献を収めた。単行本の中での編集物は、所要の小題を書題名欄に、書名と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げ筆名、筆者名は掲載誌紙の表記にしたがった。

二　年表記載で、調査者が直接あたれなかった項目については☆印を付した。

三　各稿の末尾に「採訪」と「参考文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表し、また、資料の出所、起稿や修訂にあたって参考にした文献の依拠を明らかにするためのもので、「参考文献」は資料年表と一部重複することがある。

四　表記はすべて現代仮名遣い、常用漢字を用いた。但し、人名は、各研究対象者に限り旧漢字で表記した。

五　引用文の表記は仮名遣いは原文にしたがい漢字は常用漢字を用いた。外国文の場合は訳文または大意を添付する。なお原文中の誤りや疑わしい箇所の右側に（ママ）と記した。

六　年代は日本年号と西暦とで適宜表記し、どちらからでも検索できるようにした。年齢は満年齢を用いた。

齋藤茂吉（さいとうもきち）

明治十五年五月十四日生
昭和二十八年二月二十五日歿
（一八八二～一九五三）

一　生　涯

イ　幼少年期

齋藤茂吉（別号、水上守暁、童馬山房主人。初期には齋藤貞二郎、東川等）は明治十五年（一八八二）五月十四日（戸籍は七月二十七日）、父守谷熊次郎（伝右衛門）、母いくの三男として、蔵王山を望む山形県南村山郡金瓶村（現、上山市金瓶）に生まれた。守谷家は代々の農家で、村の資産家であった。祖父の伝吉は、同村の金沢家からひでを妻に迎えたが、子供に恵まれないため、妻の弟の熊次郎を迎え養嗣子とし、末妹いくと結婚させたのである。茂吉の出生当時の守谷家には、両親、長兄広吉、次兄富太郎の他に、曾祖母、祖父母がいた。十八年六月に妹の松が生まれたが、翌月に死去。二十年七月に弟直吉が生まれる。直吉は後に上山町の旅館山城屋に入り、高橋四郎兵衛を襲名したが、終生茂吉のよき理解者であった。

二十一年四月、生家の西隣にある金瓶尋常小学校に入学。この年曾祖母が他界。学校が併合され、二十三年四月から隣村の半郷尋常小学校に通う。二十四年一月に妹なを（後に生家の隣、齋藤家の十右衛門と結婚）が生まれる。二月に祖父が死去。この頃から守谷家の菩提寺、宝泉寺住職の佐原窒応に、習字、漢文、「日本外史」などを習う。熱心な仏教信徒であった守谷家に育った茂吉に、最も多大な感化を与えたのはこの窒応和尚であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

茂吉はまた一方、齋藤豊太郎（養父齋藤紀一の父）に凧絵を学ぶ。得手な絵に熱中し、絵具の中毒で黄疸に罹った。少年の日の失敗やいたずら等さまざまの出来事を茂吉は主に、『念珠集』（昭5・8）に記している。二十五年四月に高等科に進み、九月に落成した上山尋常高等小学校高等科に転校。二十七年春、教師と友人らとの三泊旅行で、鶴岡、酒田方面に赴き、新しい世界を識る。二十九年四月同校卒業。中学校進学を希望するが受け入れられず、将来の方針を絵かきの修業か、宝泉寺の徒弟になるかなど迷っていた。同じ村の出身で縁戚関係の齋藤喜一郎（後に紀一）は、東京の浅草で医院を開業しており、成功をおさめていたが、後継者がなく養子を探していた。そのような時に窪応和尚の推薦があり、候補にのぼった茂吉は上京を促されることになる。七月に父と出羽三山に参詣。この地方では男子元服の儀として、出羽三山へ参拝する習慣があった。翌月、父に伴われて上京。窪応和尚からは餞別一封と硯一面が贈られた。なお『窪応和尚と茂吉』（黒江太郎　昭41・9）によれば、和尚は上京する茂吉のために、その出世をひたすら念じ、中林梧竹に揮毫を願い出た。それは「大聖文殊菩薩」の書であった。この墨書を茂吉は生涯大切にしたという。

ロ　上京・修学時代

二十九年八月、上京した茂吉は、浅草区三筋町五十四番地の浅草医院齋藤紀一方に寄寓。九月、東京府開成尋常中学校（現、開成高等学校）の一学年に編入学。上京を起点とした追憶随筆「三筋町界隈」（文芸春秋　昭12・1）によると、上京後の茂吉は東京弁に慣れるため必死の努力をしたが、素読は「抑揚頓挫ないモノトーンなものに

加ふるに余り早過ぎて分からぬ」と、教師と生徒から爆笑を浴びた。爾来四十年、遂に東京弁になり得なかったと記している。なお同級には、後に各界で活躍する渡辺幸造、市来崎慶一、村岡典嗣、菅原教造、内田祥三、小泉親彦、橋健行、吹田順助らがいた。この頃から次第に幸田露伴の文章に魅了され熟読する。作品から会得できる露伴特有の人生観などは、茂吉の人格形成の上に大きな感化を及ぼすことになる。茂吉は自らの進路を医学と定め、三十一年四月からドイツ語学習のため独逸協会別科に通う。一方、佐佐木信綱の『歌の栞』、『日本歌学全書』等を読み、短歌の試作をはじめたりする。齋藤紀一は浅草では流行医の一人で、専門に拘泥せずに種々の病を診察したので、患者から信望を得ていた。一方神田和泉町に東都病院も経営していたので、茂吉は三十二年五月から東都病院に移り棲んだ。七月には開成中学校の「校友会雑誌」に作文「落花を惜む」を発表。翌三十三年十一月、紀一はドイツ留学の途についた。

三十四年三月、開成中学校を卒業。七月、第一高等学校の受験に失敗したため、開成中学校の補習科に在籍し、正則英語学校に通って受験体制のたてなおしをはかる。なおこの年六月には紀一に長男西洋が誕生する。翌年九月、念願の第一高等学校第三部に合格。「同級の高野六郎博士の言によれば、寮歌も歌えず、スポーツにも縁がなく、また文学青年のタイプでもなかった」（斎藤茂太「茂吉の体臭」昭39・4）が、中寮七番室の同室には前田多門、田辺隆二、前田英一、佐藤吉郎らがおり、同じ寮内には平野久保（万里）や茅野儀太郎（蕭々）等がいたという。

ドイツに留学中の紀一は、三十五年十一月にハーレー大学の卒業試験に合格。ドクトル・メジチーネの称号

を得て、翌年一月に帰国。神田和泉町一番地に帝国脳病院を、八月には赤坂区青山南町五丁目に青山脳病院を創立し、精神病の専門医となる。なおこの年茂吉は同郷の阿部次郎が一高に在学中であることを識った。三十七年、日露戦役がおこり、長兄広吉、次兄富太郎が出征（翌年に帰還）、三月に寮内に腸チフス患者が出て寮生数人が死亡したため寮は一時閉鎖となった。それを機に退寮し帝国脳病院内に住む。三十八年春に正岡子規の『子規遺稿第一輯　竹の里歌』（明37・11）を、神田の貸本店から借読するが、このことが歌を作りはじめる契機になったという。子規崇拝の念から、子規の歌風を真似た歌を多く作り、三十八年二月から「読売新聞」の募集和歌欄に投稿、入選（筆名、齋藤貞二郎）を果たす。一方根岸短歌会の機関誌「馬酔木」を知る。

三十八年七月に紀一の養子として入籍。正式に齋藤姓となる。第一高等学校を卒業し、九月、東京帝国大学医科大学に入学。翌年二月、「馬酔木」にはじめて五首が掲載され、翌月、伊藤左千夫に入門。そこで香取秀真、長塚節をはじめ平福百穂、古泉千樫らを識ることになる。新聞「日本」の歌欄（選者左千夫）に応募し、四十年から入選歌が掲載され、同欄の堀内卓と共に注目される。四十一年一月に「馬酔木」終刊。翌月に後続誌「アカネ」が創刊されるが、左千夫は十月創刊の「阿羅々木」に移ったので茂吉も左千夫に従った。「阿羅々木」創刊号に「乱調」二十三首、その他を発表した。十二月には養父の紀一が再び外遊の途についた。四十二年一月の「阿羅々木」に、「短歌に於ける四三調の結句」及び「塩原ゆき」（五十首）、「漫言」を発表し活躍をみせはじめる。一方、左千夫に連れられてはじめて森鷗外の観潮楼歌会に出席し、上田敏、与謝野寛、木下杢太郎、石川啄木、佐佐木信綱、北原白秋等を通して、広く詩歌壇の様子に触れることができ、鷗外文学に傾倒す

る機縁ともなった。

この年二月、紀一の次男、米国が誕生する。六月末、病いに倒れ卒業試験を延期。更に十一月腸チフスを病み入院する。「阿羅々木」は九月に表記を「アララギ」に変え、発行者は蕨真から左千夫に移り、柿の村人（島木赤彦）の「比牟呂」と合併、新しい出発をなした。四十三年夏、養父紀一が帰国。十二月に東京帝国大学医科大学を卒業。卒業試験や病後のこともあり、作歌数は渺なかった。

八　活躍前期

明治四十四年一月から「アララギ」の編集を担当。一月に発表した「この日ごろ」十八首の中で、自らを「狂人守」と歌い、四月には「女中おくに」、六月「うつし身」、七月「うめの雨」、九月「秋の夜ごろ」等、逝るように多くの歌を発表、本格的に作歌と取り組むこととなる。一方、一月「童馬言」、五、七月「短歌小言」、六月から連載の「金槐集私鈔」等、評論にも力を注いだ。

四十四年二月から東京帝国大学副手、付属医院嘱託となり、七月東京府巣鴨病院に医員として勤務。院長の呉秀三、副院長の三宅鉱一に師事し、精神病学を専攻。茂吉は「文学の師・医学の師」（婦人公論　昭17・3）の中で、夜の回診の時に待ちぶせをして赤酒の処方を強要する患者や、鋏で咽喉を斬り自殺を企てる患者等がいて、当初は患者に親しめなかったと告白しているが、呉秀三から受けた学風の薫染によって次第に精神病学者の基礎が出来上がったという。夏に帰郷し蔵王山に登る。十月には開業免許状を取得。明治四十五年一月の

「アララギ」には、外部から木下杢太郎、阿部次郎等の作品を掲載した。広く歌壇の動向に注意し「アララギ」の近代化を考慮した茂吉の編集方法によるものであった。この頃から左千夫との間に、作歌観の相違からくる対立が激しくなり、やがて内部論争を招くことになる。文壇では耽美主義、理想主義などの新しい動きがあり、「アララギ」もまた進路を切り拓く時期を認識した茂吉、憲吉、文明らの意見が、左千夫を刺激する結果にもなっていた。執筆の面では、一月「アララギ」に「木の実」、二月に「赤光」、六月に「あけび」、九月の「朱欒」に「蔵王山」、十月の「詩歌」に「銀銭光」を発表。評論では一月から「童馬漫筆」（一月のみ筆名、木上守暁）を、十月から「短歌雑論」「山家集私鈔」を連載。十一月、東京帝国大学医科大学助手に昇任。

大正二年三月、紀一の次女てる子（輝子）が学習院女子部を卒業。四月に憲吉、千樫らと共に後期印象派を中心にした白樺第六回展覧会を観たりして、これら西洋絵画の影響を受けるようになる。五月、母危篤の報を受け急ぎ帰郷。一週間看護したが母いくは死去。悲嘆の情は、九月の「アララギ」に連作「死にたまふ母」、「生活と芸術」に連作「七月二十三日」の挽歌となった。七月から「アララギ」の編集発行人は古泉千樫となる。七月三十日、伊藤左千夫急死。深い衝撃を受ける。「アララギ」は十一月に左千夫追悼号を発行するが、左千夫の死は「アララギ」にとって、新しい世代への移行を示唆するものであった。この頃紀一は「五尺五寸、二十四貫という十一歳のその巨童を病院に引きとって育てた」（斎藤茂太「茂吉の周辺」昭48・11）。後の関取出羽嶽文次郎である。

大正二年十月、アララギ叢書第二編として第一歌集『赤光』を上梓。反響は大きく、歌人茂吉の地位を確実

なものにした。三年一月の「詩歌」に「一本道」、三月「アララギ」に「七面鳥」を発表。傍ら土岐哀果らの歌話会に、千樫、憲吉らと出席。四月には十三歳年下の紀一の次女てる子（輝子）と結婚。なお島木赤彦は「アララギ」の発行に尽力するため、教職を退いて長野から単身上京。六月から茂吉は「アララギ」の編集発行人となり、青山の自宅を発行所とした。六月特別号から「良寛和歌集私鈔」を連載。新婚生活に種々悩むことはあったが、八月にてる子を伴い、神奈川県三浦の長井浜に逗留。その折の作品に「海浜守命」（アララギ　大3・10）等がある。四年二月、闘病中の長塚節が死去し追悼号を六月に発行。二月号から「アララギ」の編集発行人が茂吉から久保田俊彦（赤彦）に移る。三、四月号は『赤光』の批評号となり歌壇外の数名の文人が執筆し、文壇からも注目され、好評を得たことがわかる。十一月に祖母が死去し、挽歌「山腹」を五年一月の「アララギ」に発表。この年も茂吉は鷗外、白秋、牧水、勇らと交流をはかった。

なお、茂吉と土岐哀果の論争については、哀果が「生活と芸術」（大4・9）誌上で、茂吉の歌論・近作を批評したところから端を発し、茂吉は「アララギ」誌上で激しく反論を展開、翌年四月まで続いた。

大正五年三月に長男茂太が誕生。四月には『短歌私鈔』を上梓。七月には実父伝右衛門の病気見舞いのために帰郷し滞在する。十月には郷里に帰る中村憲吉の送別の宴に出席。六年一月に東京帝国大学医科大学助手、及び付属病院東京府巣鴨病院勤務も退く。「アララギ」二月号の「童馬漫筆」に「象徴の説」を発表。この頃、三井甲之と茂吉、赤彦の「なむ」論争がおきた。四月、『続短歌私鈔』を上梓。一方、養父紀一は衆議院選挙に立候補して当選を果たした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com